

## 筵と筵織りの技術 山口県下松市西谷を中心に

著者	今石 みぎわ
雑誌名	無形文化遺産研究報告
号	6
ページ	55-69
発行年	2012-03-29
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1440/00003156/">http://id.nii.ac.jp/1440/00003156/</a>



# 菰と菰織りの技術 ——山口県下松市西谷を中心に——

今石 みぎわ

## はじめに

山口県下松市、米川地区の西谷<sup>にしだに</sup>という現戸数3戸の小さな山間集落で、2010年秋からひとつの地域おこしの試みが続けられてきた<sup>1</sup>。それは、失われつつある菰<sup>むしろ</sup>の製作技術をもう一度復活させ、伝承したいという地域の方の思いを核に進められたものである。

よく知られている通り、菰は藁などで編まれた敷物のことである。かつては人々の暮らしにとって不可欠な道具であったのが次第に用いられなくなり、西谷でもその製作技術は消滅寸前となっている。活動の目標は当初、その失われゆく菰の製作技術を映像記録として残すことにあった。しかし、菰という民具や技術の背景にあった地域の暮らしについても、その変遷を含めてできるだけ全体的に捉えたいという方針から、この1年半の間、筆者は地域の方と協働で地域の暮らしや生業、祭り、環境利用などについても調査と記録の活動を行ってきた。今年度末には、こうして収集・記録した村の生活史を整理し、映像記録と文字記録（冊子）としてまとめる予定となっている。

ところで菰の製作技術と言っても、それは藁を交互に織り込んでいくというだけの簡単なもので、全国の一般家庭においてごく当たり前に見られた技術であり民具であった。研究の視点から言えば、菰はあらゆる意味において、あまりに「ふつう」すぎ、そのみでは研究対象になりにくいものであったと言ってよい。そのためか、一地域における菰の製作技術を記録した断片的な報告は数多くあっても、それが普遍的なのか特徴的なのかを知るための、菰の技術史や時空間的な広がりを追究した研究は多いとは言えない。そこで本稿では、ひとつの事例として簡単に西谷の菰織り技術を紹介すると共に、それが菰織り技術の全体の中でどのように位置づけられるのか、関連する資料を整理すること考えてみたい。

## 1. 西谷の菰織り

### （1）西谷の暮らしと菰

山口県南東部の山間地域、かつて米川村と呼ばれた地域に西平谷<sup>にしひらだに</sup>という谷筋がある。西谷<sup>かまがら</sup>、釜柄<sup>ひらだに</sup>、平谷<sup>ひらだに</sup>の3つの小集落から成り、標高は西谷で415mほど。商工業地帯として栄える沿岸市街地からは車でわずか20分だが、直線距離で6～7kmの間に400m以上の高さを上るため勾配はきつく、町から隔たれた谷奥の山村という印象がある。2010年の冬には大雪で山中の電柱が倒れ、この一帯が最長で3日間も停電になったことなどは、その“近くて遠い”有り様をよく示すエピソードであろう。



図1 民家に保存されていた古い蕙



図2 蕙を二つ折にして作られた罌

高度経済成長期以前、西谷では年間を通して大小様々な生業を複合的に営み、また特に昭和期には煙草栽培、それ以前には養蚕、畜牛など、時代に呼応した産業を柔軟に取り入れながら生計を立ててきた。その時代への柔軟な対応が、離村という形で現われたのが高度経済成長期以降の数十年であり、この間、西谷を含む山間集落一帯では急激な人口流失や耕地・山林の放置が進み、村を取り巻く自然環境も激変した。蕙というささやかな民具と技術も、そうした暮らしとその変遷の中で受け継がれ、いま、村の縮小・衰退とともに失われようとしているのだと言える。

蕙は、昭和30年代以前は暮らしの様々な場面において最も多用されてきた民具のひとつである（図1）。基本的な用途は収穫物を天日乾燥させる際の敷物としてのもので、米をはじめ、麦、キビ、ソバ、豆、大根、茶葉、キノコ等の作物や山菜類は、すべて蕙に干した。直接敷くと地面の湿気を吸うため、蕙の下にはカヤで編んだ薦を敷き、刳干しの際には庭いっぱいに30枚くらい広げたものだという。藁が水分を吸い取ってくれるため、化繊の敷物に比べると穀物の乾燥具合は抜群によかった。このほか、脱穀や選別作業など、様々な作業時の敷物としたり、野良や屋外で敷いて休む、日よけや防風・防寒に用いるなど、おおよそ敷物の用途として思いつくことには、ほとんど蕙が使われた。運搬用としても重要で、穀物を入れたまま折りたたんで運んだり、梱包材にしたり、これを二つ折にして袋状に縫い合わせて罌<sup>かます</sup>として用いたりした（図2）。蕙は建材としても重宝され、炭窯を作る際

には土台となる杵木の上に蕙を敷き、その上に土を固めて成型したし、使い古して柔らかくなった蕙は3～4センチに切って揉みほぐし、壁土に混ぜて塗り込んで補強材や割れ防止に用いた。穴が空けば修繕もし<sup>2</sup>、丁寧に使えば30～40年はもったというが、いよいよ寿命が尽きれば最後には耕地に鋤きこんで肥料とした。藁から作られた蕙が再び土に戻り、稲の肥やしとなるという循環が当たり前のように繰り返されてきたのである。シンプルな形状であるからこそ多用途に使いまわされてきた蕙は、最も身近な民具であったと同時に、暮らしの中でなくてはならない必需品でもあった。

西谷では、蕙は農閑期の女性の手仕事として各戸で作られていた。上質の蕙を手早く織るにはもちろん熟練を要するが、複雑な工程や高い技術は必要としないことから、蕙と同様、製蕙<sup>せいゑん</sup>という行為もごく当たり前の生活の一部であった。自家用としてだけでなく、副業として蕙を製作・販売していた人もいたといい、例えば1841年の萩藩領の村勢報告書である「風土注進案」（下松市史編纂委員会1989）でも、西谷が属する旧下谷村、および切山村の産物のひとつとして「蕙」が挙げられている<sup>3</sup>

(表1)。平地から山裾にかけて位置する末武中村や平田開作村に比べ、山間集落であった下谷村、切山村は圧倒的に産物が多く、複合的な生業構造によって生活を営んできたことがわかるが、苧をはじめとする蓼製品の製作・販売もそうした生業のひとつと位置づけることができるだろう。

## (2) 西谷の苧織りと苧機

では、苧はどのように作られたのだろうか。素材の準備から織りあげ、使用までの詳しい技術については、伝承活動を通して作成される映像記録と冊子に譲るとして、ここでは簡単に、西谷の製苧道具と技術の原理を紹介しておきたい。

西谷で製苧に用いられるのは苧機むしろばたと呼ばれる組み立て式の木枠で、ここに経糸として撚った蓼縄を張る(図3)。経糸は上糸と下糸が隣り合っており、その上下(前後)の糸の間によこ糸となる蓼を通していくことで苧が織られる。西谷では経糸の数は上糸21本・下糸21本の計42本で、これで幅およそ3尺、長さ6尺(90×180<sup>センチ</sup>)程度の苧が織りあがる。

苧織りの要領は原理的に機織りと同じで、図3のBが、篋おさ(経糸を順序よく整列させ、よこ糸を打ち込むための装置)と綜統そうこう(上糸と下糸を前後させるための装置)の2つの役割を果たしている。西谷ではこれをコテと呼んでいる。コテは、片面の入口は丸い穴、反対面の出口には奥に向かって三角に切り込んだ長四角の穴があけてあり、その穴の組み合わせが交互に並んでいる(図4)。このひとつひとつに経糸を通していくと、隣り合う二つの穴(丸と四角)が上糸と下糸となるので、図5のよ

	末武中村	平田開作村	切山村	下谷村
人口	959人	546人	635人	771人
米	1444.82石	330.04石	861.00石	838.26石
麦	538.07石	64.58石	230.09石	366.25石
豆類	33.00石	6.00石	264.70石	21.48石
ソバ	44.80石		235.20石	113.40石
キビ			8.30石	2.50石
ヒエ				4.00石
シイナ	214.05石		132.40石	145.78石
イモ類			166荷	1200貫
大根	8800貫	1370荷	14930貫	12000貫
ナス		117荷	498荷	990荷
木綿	1800反	612		
繰り綿			39.00貫	
苧楮			100束	
楮			10釜	1600.00貫
ハゼの実	120貫		120.00貫	63.50貫
梅の実			50荷	
茶			1500斤	1200斤
タバコ				1900斤
カヤ				400 <sup>本</sup>
タケノコ				1000把
タケ				300 <sup>本</sup>
薪			7200把	9500荷
雄木炭				100俵
蓼縄				1000束
縄		11500束	500束	
薦			42713枚	
苧			750枚	150枚
草鞋			12000足	8000足
草履				100足
半紙			10丸	
駄賃銀				4.08貫

表1 萩藩領の産物一覧  
(「風土注進案」『下松市史』より抜粋)

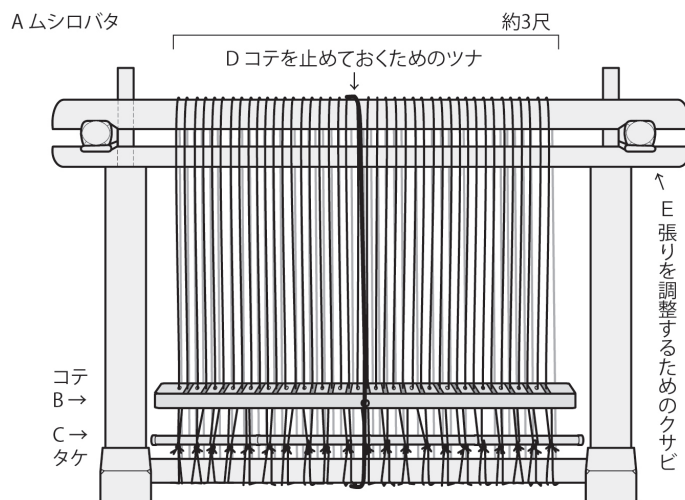


図3 西谷の苧機とその構造

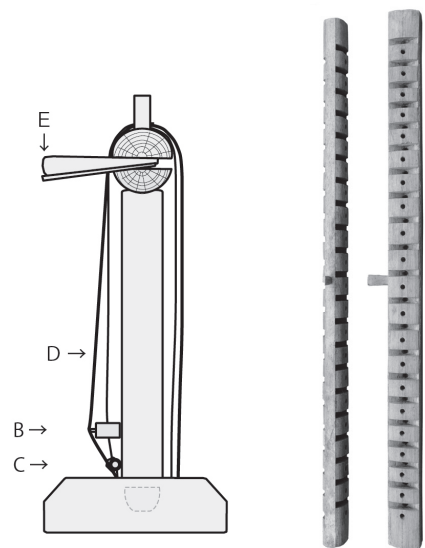


図4 コテ



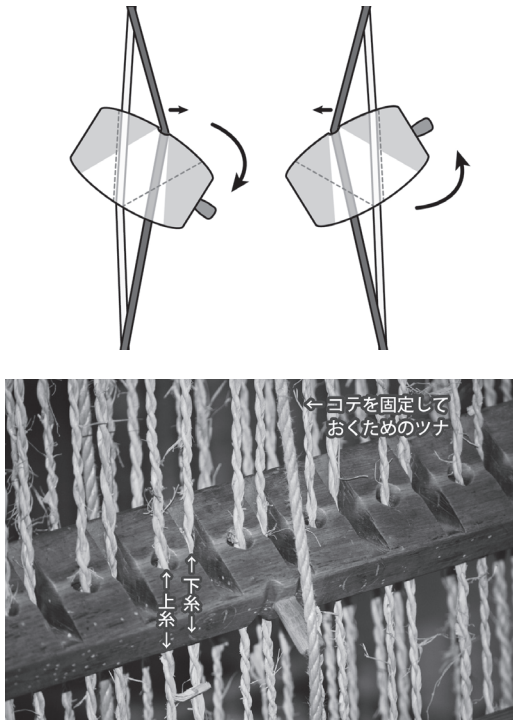


図5 コテの構造と機能

うにコテを上下させて、上糸・下糸の上下（前後）を入れ替える。この間によこ糸となる藁を挿し入れ、上からコテで打ちつけて締め、今度はコテを反対に回してよこ糸を入れ…ということを繰り返して織っていくのである。よこ糸は、サシ、<sup>(1)</sup>ピーサシなどと呼ばれる鉤状になった竹棒に、藁の穂の部分が内側に来るように引っ掛けて、引き込む。その間、コテが邪魔になるため、ムシロバタにピンと張った粗縄（D）にコテの突起部分を引っ掛け、少し上の方で止め押さえておく。よこ糸をコテで打ちつけることから、蒔織りの作業は「蒔打ち」と呼ばれた。

目が粗い蒔、つまりよこ糸となる藁を一度にたくさん入れた蒔は、糊を干す際に糊が藁の間に挟まってしまうため都合が悪い。そこで、一度によこ糸とする藁は2本程度が適当とされた。そのようにして作る蒔の一人前の

仕事は、家によっても異なるが1日1枚程度であったようだ。特に丁寧に作る場合や、別の仕事の合間に行なう際には2～4日に1枚織りあげればよしとされたが、明治生まれの親や祖母の代の女性たちはひとりで1日2枚も織ったものだと記憶されている。また蒔に限らず、こうした手わざに関して必ず達人と呼ばれる人がどの村にもいるもので、西谷近郷では須々万本郷牛ノ毛（現周南市）の中村という家の主婦が一日3枚は織るということでも有名だったという。

次に見るように、全国的に見ればこうした手織りの蒔機は、明治期以降、半自動式のもの、自動式のものに置き換わっていく。しかし、あくまで自家用の蒔を年に数枚織るだけであった西谷では、自動製蒔機はついに導入されることなく、蒔の時代の終焉を迎えたのである。

では、西谷における蒔織りの技術は、製蒔の技術史や系譜の中ではどのように位置づけられるのだろうか。調査には不十分な点が多く、細かな技術の系譜については不明な点も多い。しかし今後の研究へ繋げる意図から、本稿ではまず、蒔と蒔織りの歴史を簡単に振り返り、次いで特に蒔機の形態にみられる技術の系譜について、これまでに判明していることをまとめておきたい。

## 2. 蒔と蒔織りの歴史

### （1）「蒔」の範囲

蒔がいつの時代から使われていたのか確かな記録はないが、宮崎清が、考古遺物や関連する織りの技術等の出現時期などを鑑みて「縄文時代後期から弥生時代にかけて、蒔や薦など、住いのなかの敷物の原型はほとんど完成されていたとみなすことができそうである」（宮崎1985b）と述べている通り、この簡便な敷物は有史以前から用いられてきたと考えてよいだろう。ただし、歴史的に見れば、そもそも「ムシロ」という言葉が指し示す範囲は、西谷のような藁蒔に限られなかった。例えば小学

館の『日本国語大辞典』には「蓆・蓆・席・蓆」として「蘭・竹・藁・蒲<sup>がま</sup>などで編んで作った敷物の総称。平安・鎌倉期は屋内用であったが、畳の普及後は屋外用となった」とあり、様々な材で作られた敷物の総称であったことがわかる。竜鬚蓆<sup>りゅうびん</sup>や稲蓆、藁蓆など材料名を冠した名称も使われ、10世紀の『倭名類聚抄』では「蓆」は竹製、「席」は薦<sup>こも</sup>製など、材料によって漢字が使い分けられていたことが示されている。

その広義の「蓆」の中に包括されていた敷物としては、藁蓆の他に、例えば今日で言うゴザ（藁蓆・御座）や畳表、薦<sup>こも</sup>などがある。これらはゴザムシロ、コモムシロなどとも呼ばれるように、その名称は明確には区別されてこなかったと言ってよい。このうち狭義の薦はマコモを用いて編んだ敷物を指し、ムシロに比べて経糸の本数が少ないことから、歴史的に見ても蓆とは異なる技術で製作されているらしい。その違いを一言で表わすならば、薦が「編む」ものであるのに対し、蓆は「織る」ものと言うことができ、狭義の蓆とは比較的区別しやすい<sup>4</sup>。一方、狭義のゴザや畳表は、基本的にイグサを原料とし、より細かい目の敷物を指すことが一般的である。例えば室町時代の「職人尽歌合絵巻」である『七十一番職人歌合』（1500年成立か）では、「蓆打<sup>むしろうち</sup>」職人が2種類の敷物を手に「てしま蓆<sup>むしろ（お買いなさいませ）</sup> かうしまへ 御座も候ぞ」（岩崎1993）と口上を述べており、このうち目の詰んだ方がゴザと思われる。ただし、同じ蓆打職人が「むしろ」と「御座」を扱っている通り、この2種類の敷物の製作に用いられる機道具や技術は、少なくとも近世の段階では構造的・原理的に同じものであったと思われる。これについては後述したい。

これらに対し、狭義の蓆は基本的に稲藁で作られるもので、それは『和漢三才図絵』（1712年）に「藁蓆<sup>ワラムシロ</sup> 処々、皆之を織る。農家、穀を乾し、綿を包み、又 畳の表に代ふ、其用 最も多し也」（傍点筆者）とある通り、敷物類の中でも最も多用されていたようだ。宮崎清は蓆の用途について、次のような「秩序」もあったことを指摘している。西谷ではこうした体系的な利用はすでに聞くことができないので、少し長いが引用しておく（宮崎1995）。

蓆の使いぞめは正月ときまっていた。ワラの香りいっぱいの新品の蓆は囲炉裏の周囲に並べられ、あたたかな敷きものとなった。一年間囲炉裏まわりで使われていくうちに、蓆は囲炉裏を囲むひとびとの重みによって押しつぶされ、やわらかく、目のつんだものになる。次いで、蓆は、穀物乾燥や脱穀の敷きものとして使われた。目のつんだ蓆によれば、米はもちろん、小豆や胡麻のような小さな粒物まで乾燥・脱穀できたのである。山村にあっては、山菜干しの敷きものとしても用いられた。そして、数年してほころびが生じ、補修に補修を重ねても敷きものとしての用をなさなくなると、押し切りで裁断され、土壁の寸<sup>す</sup>沙<sup>さ</sup>として用いられた。

## （2）副業としての製蓆の歴史

藁蓆は単に自家用の民具として不可欠であったに留まらず、古い時代から重要な生産手段、商品としても機能していた。宮崎清は、すでに12世紀初頭（天永年間）の京都では、商工民の組合組織のひとつである「蓆座」が組織されていた可能性が高いことを指摘し、「少なくとも平安時代後期には蓆を商品として市場へ放出することが行なわれており、その背後には商品として蓆を製作する職人の活動があったとみなければならない」（宮崎1985b）としている。実際、先に挙げた『七十一番職人

歌合』のほか、同じく中世の職人尽歌合絵巻である『東北院職人歌合』（1214年以降）にも職人としての「筵打ち」が登場するから、すでに当時から、商品として十分成り立つほど筵の需要が高かったことがわかる。また『七十一番職人歌合』の筵打ちが手にしている「てしまむしろ」は、当時摂津名産として知られていた「手島筵」のことと思われ、宮崎清も指摘する通り（1985b）、「摂津で製作された筵が京都で売られていた」のであり、「筵の流通が広範囲に展開されていたことが窺える」のである。

近世に入ると、職人というよりも、一般の農山村民が副業として製筵を行なったことを示す史料が多数見られるようになる。例えば元禄三年（1690）に上方で著わされた『人倫訓蒙図彙』（朝倉1990）では、「山賤<sup>やまがっ</sup>のわざ」すなわち農山村の庶民の仕事として「筵打<sup>むしろうち</sup>」がなされること、「都へもち出て、これを売<sup>うる</sup>」こと、また常に筵を売っている所も端々にあることなどが記されている（p.62-②参照）。関連する記述は近世農書類にも多数記録されているが、特に北陸では盛んであったようで、1707年の加賀国御供田村（現金沢市）では「十二月 皆済して後、男共かせきにハ所により筵を織、或ハ繩蔣<sup>（こも）</sup>来年の米依編ならびに結縄拵、牛馬の沓・草鞋など、所によりて其業品々有」（土屋1980）と記録されている<sup>5</sup>。1789年の越中砺波郡でも「十一月下旬頃、稲も扱すまし御収納も斗仕廻へ」た後、特に「小農ハ作り出したる藁にて筵、蔣<sup>（こも）</sup>を織、又ハ草鞋を作りて駄家へ出し売て多情にする也」（宮永1979）とあるから、やはりこれを販売していたことがわかる。

近世を通して農山村民の副業として行なわれた製筵は、近代に入ると、明治政府の副業推奨政策や技術革新により、さらに広く行なわれるようになる。これについても宮崎清の研究（1985b）に詳しいが、大正・昭和期を通して筵の生産が盛んであったのは富山や石川などの北陸地域や東北の各県であったというから、近世からの伝統が引き継がれていることがわかる。とりわけ富山県は盛んで、大正11年（1922）の副業生産のうち最も産額の高いのが藁製品であり、中でも製筵が最多であったと報告されている。特に下新川郡上中島村では、米10<sup>キロ</sup>が2～3円の時代に、筵は年間39万2千枚余りが織られ、51,129円の収入となっていた（富山県内務部産業課 1922）。北陸以外でも、例えば滋賀県南比都<sup>ひつぎ</sup>佐村の上駒月、下駒月、深山月（現日野町）では、昭和40年（1965）ころまで筵の生産が非常に盛んであったという。昭和11年（1936）の新聞記事によれば、上駒月の製筵の始まりは当時で300年を遡り、戸数90戸のうち88戸がこれを営んでいたという。嫁姑は朝4時半から夜11時頃まで一年340日これを打ち、「小学生は放課後歩行縄<sup>（あしな）</sup>といって、あるきながら縄ないをするくらいの徹底ぶり」であったと報告されている（大阪毎日新聞1936、日野町史編さん委員会2008）。大阪府摂津市味舌<sup>ましだ</sup>のように、製筵だけでなく筵機の製作・販売まで担っていた地域もある。

このように製筵が各地で重要な副業として成り立っていた背景には、製作者からすれば素材となる藁や藁を加工するという技術が身近なものであったこと、また、消費者からすれば筵に対する高い需要があったことなどが挙げられるだろう。昭和6年の『農家副業ニ関スル研究調査』（三宅1931）に筵は荷造り用として製織、製糸、製紙等の工場でも需要が高かったとある通り、これを必需品としたのが農林業や漁業など第一次産業に携わる者に限られなかったことも、その大きな需要を支えた背景のひとつであっただろう。

### 3. <sup>むしろばた</sup>苧機にみる織りの技術

その苧は、歴史的にみてどのような技術で織られてきたのだろうか。西谷で苧製作のことを「苧打ち」と呼び慣わしていることはすでに触れたとおりであるが、先に挙げた中世の職人歌合絵巻や17世紀の『人倫訓蒙図彙』でも「苧打ち」という言葉が見られ、また最古の農書とされる「農業全書」（1697年）でも「蘭」を「寝席にうづなり」（宮崎安1978、傍点筆者）とあるから、古来より「苧」は「打つ」ものであったことがわかる。つまり、すでに中世より、苧はオサのような道具で打ちつけて作るものであり、編むのではなく織る技術で製作されていたことがわかるのである。しかも残された絵画史料などからは、その具体的な技術が、西谷に現在まで伝えられているものと同系統であったことを読みとることができる。そこで本節では、中世・近世史料に描かれたものから近代のものまで、手織りの苧機を紹介し、その技術や系譜を辿ってみたい。

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
a 経糸調整	×	?	△	○	×	○	○	○	?	○	○	○
クサビ				●		●				●	●	
傾斜								●				●
b オサ止め	×	×	○	○	×	×	?	○	○	○	○	○
c 上部横棒	×	?	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○

表2 苧機とその機能

※表中の番号は次頁の図版番号に符合

見られ、また最古の農書とされる「農業全書」（1697年）でも「蘭」を「寝席にうづなり」（宮崎安1978、傍点筆者）とあるから、古来より「苧」は「打つ」ものであったことがわかる。つまり、すでに中世より、苧はオサのような道具で打ちつけて作るものであり、編むのではなく織る技術で製作されていたことがわかるのである。しかも残された絵画史料などからは、その具体的な技術が、西谷に現在まで伝えられているものと同系統であったことを読みとることができる。そこで本節では、中世・近世史料に描かれたものから近代のものまで、手織りの苧機を紹介し、その技術や系譜を辿ってみたい。

#### （1）苧機の構成要素

苧機は元々が比較的単純な道具であるため、細かな系統分類をすることに意味は見いだせない。また、機能的にみても大きな差異は認められないが、次の3点は、機の型式を捉える際の大まかな指標として挙げうる（表2も参照）。

- 経糸の張りを調整するための機能の有無
- オサ\*を固定しておくための機能の有無（\*綜統部分、西谷で言うコテ）
- オサ止めの綱をかける横棒の有無

このうちaの経糸の張りを調整する機能としては2種類あり、ひとつはクサビによる調整で、西谷のように機上部の横棒にクサビを打ち込む地域と、次頁⑩の織機のように2本の支柱の下部にクサビを打ち込む地域がある。もうひとつのタイプとしては、次頁⑧や⑫のように機自体に傾斜をつけ、張られた経糸と支柱との間に棒などをかませるもので、丹後ではこれをケンと呼んだと報告されている。

bのオサ止めの機能は、西谷のように中央に回した縄にオサを固定しておくのが一般的である。苧製作は1人で行なう場合と2人で行なう場合が報告されているが、2人の場合、役割は打ち手と藁の挿入工に分けられる。オサ止めの機能がない地域では、藁を通す間、誰かがオサを押さえておかなければならないから、製苧はたいてい2人で行なわれる。aの機能を有する苧機でも2人で作業されることもあるから一概には言えないが、この機能が付加されることにより、2人織りから1人織りへと、作業効率が向上した可能性は指摘できる。

cは、オサ止めの綱を引っ掛けるための横棒を機上部に付属させたものである。このように別付け

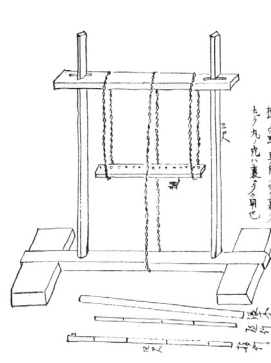




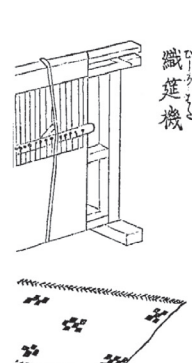
①「筵打」『東北院職人歌合絵巻』  
1214 年以降成立



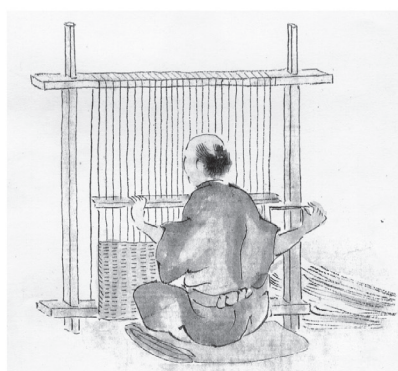
②「筵打ち」『人倫訓蒙図彙』  
1690 年



③「筵機」『耕稼春秋』  
(石川) 1707 年



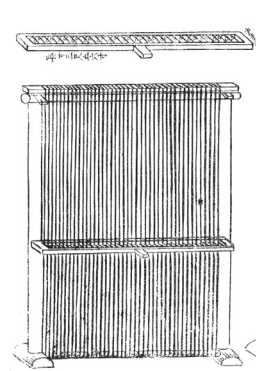
④「織筵機」  
『和漢三才図会』1713 年



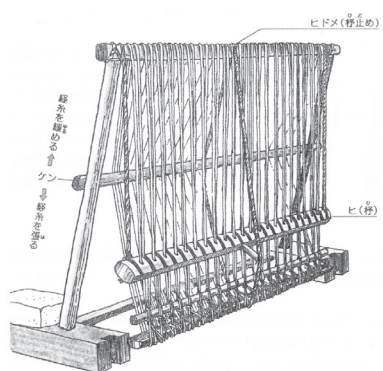
⑤「筵捆圖」(右)



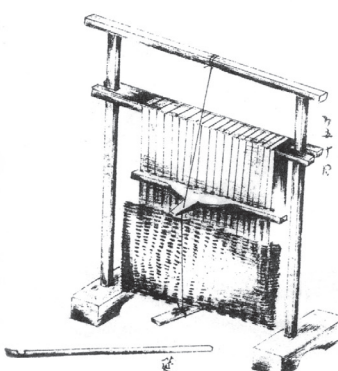
⑥「具座捆圖」(左)『民家検労図』(石川) 1830 年頃



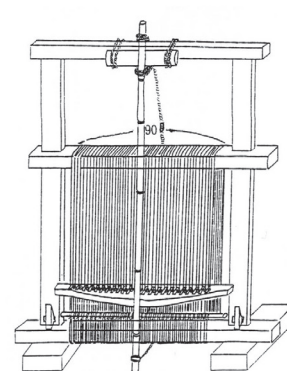
⑦『広益国産考』(豊後) 1859 年



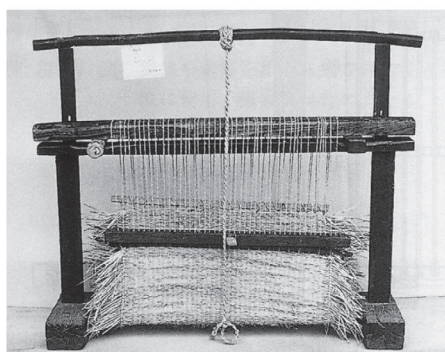
⑧京都府丹後の筵機  
『丹後の海に生きる漁師さんを支える職人たち』



⑨秋田県平鹿郡の筵機  
『槐田縣普通農具圖解』明治前期



⑩新潟県豊栄の織機  
『とよさかのワラ細工』



⑪岩手県玉山村の筵はたし『実測図のすずめ』



⑫広島県旧大和町の筵織 1966 年宮本常一撮影(周防大島文化交流センター所蔵)



【出典】①②国立国会図書館のデジタル化資料、③『日本農書全集 4』農山漁村文化協会 1980、④「近代デジタルライブラリー」国立国会図書館、⑤⑥『民家検労図』石川県図書館協会 1995、⑦『日本農書全集 14』同前 1978、⑧京都ふるさと文化再興事業推進実行委員会 2002(京都府立丹後郷土資料館提供)、⑨渡部景俊『農具図解』秋田文化出版 2008、⑩豊栄市博物館 1993、⑪名久井芳枝 1986、⑫周防大島文化交流センター提供

にした方がピンと張り、作業中にオサが落下することは防ぎやすいことから、これもbの機能に新しく加えられたささやかな改良かと思われる。

## (2) 苳機の系譜

以上を念頭に、具体的に苳機を見ていきたい。まず①は『東北院職人歌合絵巻』（十二番本、三熊思孝摸写本版、1789年）に描かれた機で、年代的に古いだけでなく、機能的にも最もシンプルなものである。描写が正しければ上記abcいずれの機能も有していない。ここでは縦糸となる縄は20本で、今日に伝承される藁苳とはほぼ同じ数である。オサに当たる道具の描写は精密さに欠けるが、これを固定しておくための装置はなさそうであり、打ち手と挿入工の2人で作業している。この①と、②「苳打ち」⑤「苳<sup>うづ</sup>搦圖」の間には450～600年以上の時代の開きがあるが、これらは同じ構造の機と思われる。ただし、②⑤は1人で作業しているように見える。

⑥は⑤と同じく、天保初年（1830年頃）成立とされる『民家検労図』に描かれた加賀国能美郡の「呉座搦圖」であるが、⑤の機に経糸調整機能（a）というわずかな改良を加えたもので、基本的な構造および技術は同じであることがわかる。「呉座」は「藁草」で作られると記され、経糸の数も「苳」より多く描かれており、目が詰んでいる。同書には藁草の栽培方法も紹介されているから、こちらは商品として作られたものかと思われる。これを打つのが女であるのに対して藁製の苳を操るのは男性であり、「苳 縄 俵ラ ばんどり等年中入用之分、十二月より正月、野間雪消る迄に拵置」とあるから、自家用であったことがわかる。

⑤の機にはオサ止めの機能（b）が描かれていないが、これより120年ほど前の近隣地域ではオサ止めを持つ苳機がすでに記録されている。③1707年の加賀国御供田村（現金沢市）の農書、『耕稼春秋』に描かれた苳機がそれで、中央に渡された綱がこれに当たるとと思われる。同書では、苳は12月に農作業が終わった後に男たちが織るものと説明され、機についても次のようにある。

苳機 槓にてする也。枇杷、かきの木也。代銀式匁より式匁五分也。樋ノ穴四十、且角ノ穴ハ裏ニテ丸ク、丸ノ穴ハ裏ニテ角也。三尺…（中略）…幅三尺の間に合苳堅縄十九目立る也。一目と云ハ二筋也。一枚に堅縄四十式尋、藁八把或八十把入物也。

これによって「樋」が槓の木などの堅木で作られたこと、道具は購入していたことなどがわかる。樋は表裏で丸い穴と四角い穴が組み合わされているというから構造的には西谷のものと全く同じである。また樋の40の穴に堅縄（経糸）19本（上糸・下糸合わせて38本）を通して使ったとあるから、この機で作られていたのが藁苳であったことがわかる。図中の下部に並べられた棒状の道具のうち、「張木」とあるのは⑧の苳機のケンと同様、経糸の張りを調整する道具であったと推測される。

④は1713年頃に大坂の医師・寺島良安によって著わされた『和漢三才図会』に記載されている苳機で、オサ止め（b）に加えて、クサビによって経糸の張りを調整する機能（a）も備えており、西谷の苳と全く同じ構造をしている。

⑦は琉球藁草の「苳」、すなわち狭義のゴザを織るための機であるが、図絵をみる限り、藁苳を織るための機と構造的にまったく同じである。その技術も同じであることは「織事ハ校竹にて緯を行ハおること えさしたけ よこ やるわらむしろ おる藁苳を織と同じ事也」（大蔵1978）と説明されている通りで、違いと言え、オサの目数——すなわ



ち経糸の数——が藁筵の倍（縦糸41本、上下糸合わせて82個の穴）あるという点のみである。これで藁筵とほぼ同じ幅（3尺2寸）の敷物を織り上げるという。

以上①～⑦は直立する四角い木枠を用いた構造を持つ機で、中世から近世にかけて広くみられたものである。これらの機のうち、機能上、特に肝要なのは綜統の役割も果たすオサであるが、こうした史料を見ると、遅くとも1700年代初頭には現在伝承されているものと同じ構造の道具が使われていたことがわかる。それより古い時代の①②のオサについては詳細が不明であるが、その他の機の構造にほとんど差異がないように見えるから、すでに中世の段階から、オサが同様の機能を備えていた可能性は高いとみてよい。

一方、⑧～⑫に挙げたものは近代以降の筵機で、近世にみられた機に若干の工夫が加わったものもある。このうち⑧と⑫はa経糸調整のために傾斜をつけたもので、⑨～⑫はcオサ止めの綱を引っ掛けるための横棒を機上部に別付けした筵機である。ここに挙げたのはほんの数例であるが、こうした横棒を備えた筵機は東北から九州まで全国各地で散見されるから、広く分布した形式であったらしい。いずれにしても、近代以降に見られる手織りの筵機は近世のものに比べても大きな改良はなく、かつ、そのわずかな差異を持つ筵機が、各地に散在してみられたことがわかる。

ここに挙げたような完全に手動の機に対して、近代以降、急速に普及したのが足踏み式などと呼ばれる大型の半自動製筵機である。その出現時期については<sup>6</sup>、宮崎清が佐賀県有明町の事例の中で明治33年以降に作られるようになったと報告しているが（宮崎1985a）、大正期ともなると全国的にもかなり出回っていたようだ。昭和6年（1931）の『農家副業ニ関スル研究調査』（三宅1931）によれば、足踏み式の製筵機が発明されてから「一大革命」が起こって、筵の大量生産が可能になったと言う。例えば大正10年（1921）に行なわれた「製筵競技記録」（富山県内務部産業課1922）では、1枚のムシロを打ち終えるのに「旧式」では1時間12分かかったのが（これすら相当早い記録である）、新式の「堤式製筵機」では15分20秒と記録されており、いかにその効率が向上されたかがわかる。

その後、昭和10年頃には福岡県で回転型製筵機と呼ばれる自動式製筵機が考案される。この回転型はオサの運動や藁を挿しこむ動き等が連動して自動で行なわれるもので、従来の足踏み型に比べても効率は1.5倍、熟練すれば2倍と謳われた（二瓶1949）。この新式製筵機は開発後にも継続的に改良が加えられ、九州諸県のほか、戦後は関東や東北へも普及したという<sup>7</sup>。こうした改良型の機が、近代の副業として製筵の興隆を支えた立役者であったと言ってよく、やがて多くの土地で旧式の筵機は姿を消していったのである。

### （3）筵機の形式の展開

ここまで中世から近代にかけての手織りの筵機を見てきたが、このように並べてみると、時代的にも最も古い①の機から、オサ止の綱を掛けるための横棒と傾斜を持った⑫の機に向かって少しずつ改良が加えられてきたことがわかる。このうち西谷の機は、中世・近世に見られる最もシンプルな箱型木枠の筵機と同じ構造をしており、筵機の古い形式を留めたものと言ってよいだろう。

ただし、これらの機のa～cまでの構造的差異やその組み合わせの在り方は、先述した通り技術面から考えればわずかな違いであり、中世のものから西谷のものまで、7世紀以上の時代を経ても、

要素 地域	A 全体名称	B 綜統	C 織始の支棒	D オサ止	E 経糸調整具	F 蓆通し	素 材	経糸 の数	出 典
山口県西谷	蓆機	コテ	タケ	ツナ	名称不明	サシ	蓆	21本	
新潟県豊栄市	織り機	オサ	竹棒	弓		サンゴ	蓆	23本	とよさかの ワラ細工1993
石川県金沢市	蓆機	ヒ	屋竹?			指竹	蓆	19本	耕稼春秋 1707
京都府丹後	蓆機	ヒ	名称不明	ヒドメ	ケン	サシダケ	蓆	22本	丹後の海に 生きる2002
豊後国	機	をさ	名称不明		力木	えさしたけ	琉球蘭	41本	広益国産考 1859

表3 蓆機と各部名称（表のアルファベットは図3の記号と符合している）

大々的な改良は加えられていないことがわかる。また、そうした時代的变化のみならず、蓆機は地域的变化にも乏しい。管見の限りにおいて、現存する手織りの蓆機は全国的にも非常に似通っており、従って、その製作技術もほとんど同様であったと考えられる。より正確に言うとするれば、確認したような細かな型式の違いはあっても、それが地理的連続性をもって分布するのではなく、全国各地に散在している。それは機の構造のみならず機道具の各部名称にしても同様で、例えば「オサ」に当たる部分の名称などは、すでに近世から地域によって交錯している（表3）。こうした蓆機をめぐる状況は、蓆織り技術の展開が、地域の内発的な発明や改良によるものではなく、ある程度完成してから各地に導入されたことを意味していると考えてよい。またその背景には、蓆機の構造自体が非常にシンプルで改良の余地がほとんどなかったこと、蓆織りの技術が、歴史的に見て早い段階から全国各地に広まったことなどが挙げられるだろう。

もう一点、蓆機とその技術について確認しておかなければいけないのは、これらの構造を持つ機で作られたのがいわゆる蓆蓆だけでなく、今日で言うゴザなどの敷物も織られていたことである。それは図版の⑦で見た通りであるが、近代以降でも、例えば新潟県豊栄市では、⑩の「織り機」を用いて蓆の蓆とスゲやイグサの「蓆」の2種類を作ったという（豊栄市博物館1993）。その際には、オサを蓆用（目数46）とスゲ・イグサ用（目数58～62）と替えることによって織り分けたと報告されているから、蓆蓆とゴザが同じ機、技術を用いて作られていたことがわかるのである。こうしたことを鑑みれば、蓆蓆の製作技術を知ること、現代日本人にとっても馴染み深い、ゴザをはじめとする敷物の古い製作技術を知ることにも繋がるものである。西谷の蓆機の中には、そうした敷物全般に関わる古い技術の在り方も留められていると言ってよいのである。

## おわりに

ここまで西谷の蓆織り技術を核に、蓆機の変遷を紹介してきた。そもそものが記録活動に伴って副産物的に得られた資料群であるから、調査が不十分であることは否めない。例えば各地に蓆機とその技術を伝えたのはどういった人々だったのか、特にオサやコテと呼ばれる道具は精巧な作りになっており、その製作には専門の職人の技術が必要であったはずであるが、それは誰がどのように担っていたのか。また機や機道具を作る木材には特定のものがあったのかどうか、あるいは織り手は男性である



のが一般的であったのかなど、ここで描いたアウトラインを元に、今後も引き続き調査・検証作業を続けていく必要があるだろう。

蒔は、同じ藁細工である草鞋やアシナカ、エヅメや蓑などと比べても、ただ四角くのっぺりとしていて、製作技術もあまりにシンプルである。全国を見渡しても有意な地域の特徴が見いだせるわけでもない。しかし、蒔をはじめとするそうした些細な技術の積み重ねで人々の暮らしや文化が成り立っていたこと、またそれらがいかに小さくとも、欠かすことのできないピースのひとつであったことも事実であろう。同じく衰退・消失の危機にあったとしても、珍しく特徴的な技術やモノ、暮らしの在り方は調査・記録され、時には民俗文化財として守られることがあっても、単純で当たり前の技術や知恵はひっそりと忘れられて歴史の表舞台から消えていく。実際に筆者も、地域おこしの一環として、学問的追究とは全く別の観点から地元の方が蒔を取りあげることがなければ、自発的に取り組むことのなかったテーマであったと言ってよい。改めて、こうした小さな民俗技術についての研究・調査を積み重ねていくことの必要性、緊急性について考えさせられると共に、そうした調査において果たすべき民俗学の役割について思わざるをえない。

#### 《参考文献》

- 朝倉治彦校注1990『人倫訓蒙図彙』平凡社  
 岩崎佳枝校注1993「七十一番職人歌合」『新日本古典文学大系61』岩波書店  
 大蔵永常1978「広益国産考」『日本農書全集』14巻 農山漁村文化協会  
 大阪毎日新聞1936「輝く更生の村々」『大阪毎日新聞』（10月27日～11月7日）  
 加賀藩改作御役所編1978「農隙所村々寄帳」『日本農書全集』第5巻 農山漁村文化協会  
 産業組合中央会 家の光1938『家の光農業実験』第2集 東京育生社  
 下松市史編纂委員会1989『下松市史』通史編  
 土屋又三郎1980「耕稼春秋」『日本農書全集』第4巻 農山漁村文化協会  
 帝国発明協会1911「花筵業之恩人 磯崎眠亀翁」『現代発明家伝』  
 富山県内務部産業課1922『藁工業に関する調査』（副業資料其一）  
 豊栄市博物館1993『とよさかのワラ細工』  
 二瓶貞一1949『新しい農機具のはなし』日本農業新聞  
 日野町史編さん委員会 2008『近江日野の歴史』第6巻（民俗編）  
 三宅種造1931『農家副業ニ関スル研究調査』森脇活版所  
 宮崎安貞1978「農業全書」『日本農書全集』13巻 農山漁村文化協会  
 宮崎清1985a『藁Ⅰ』ものと人間の文化史55-I 法政大学出版局  
 —— 1985b『藁Ⅱ』ものと人間の文化史55-II 法政大学出版局  
 —— 1995『図説 藁の文化』法政大学出版局  
 宮永正運1979「私家農業談」『日本農書全集』第6巻 農山漁村文化協会  
 森暢編1979『新修日本絵巻物全集』第28巻 角川書店  
 山本茂作編1938『都濃郡米川村誌』合田印刷所

吉原睦 2008 『磯崎眠亀と錦莞苧』（岡山文庫 253）日本文教出版

# 《注釈》

- 1 西谷のある米川地区（旧米川村）はこれ以前から熱心に地域おこし活動に取り組んできた地域である。例えば西谷では2004年に「西平谷川の清流を守る会」を結成し、ハイキングコースの整備やアマゴ（イワナ）の稚魚育成・放流、子ども会の山菜採り遠足などを行ってきた（2010年現在の会員数は22名）。また翌2005年には、この「清流を守る会」のように地域で個々に活動しているグループがお互いに連携するために「米川地域づくり連絡協議会」が作られた。この協議会は直面する過疎化や高齢化と向き合うため、農用地の保全や荒廃地の活用、交通弱者への対策、介護保険施設の誘致などを目標に掲げて活動しており、例えば2011年2月からは、買物難民となりがちな高齢者を町の商業施設まで送り迎えする、ワゴン車の「あったか便」が運行を始めている。今回の記録活動も、こうした地域おこし活動の下地があって実現されたものといってよい。
- 2 こうした知識は広く共有されていたもので、例えば香川県でも「鼠にかまれた苧の簡単な修繕法」として、次のようなものが報告されている（産業組合中央会 家の光1938）。

苧のまん中に、穴があいて使へなくなったものは、うすめにぬった小麦糊を穴のまはりにぬり、上へかたい布を張りつけて、日光でよくかわかします。布のうすいときは、乾いたうへに一めんに糊をぬり、二重にはってかわかすと、立派に使用できます。
- 3 あるいは昭和13年（1938）の『都濃郡米川村誌』（山本1938）には「村民は米麦作を主とする農業に従事し傍ら林業其他の副業に従事せり、工業は…（中略）…石炭の製造あると 農閑期を利用し副業として藁製品（縄苧俵菰）の製造あるの外観るべきものなし。副業は木炭製造、養蚕、葉煙草耕作、藁製品、養畜、養鶏、製茶等なり」とあり、「生産物数量及価格」として、苧を含めた藁製品で1,735円（合計259,044円中）となっている。
- 4 ただし宮崎清の報告によれば、佐賀県有明町では明治23年頃に苧機が導入される以前は、いわゆる薦編み機である「コモゲタ」で苧が「編まれて」いたという。それが明治23年頃を契機に「編む苧から織る苧への転換」が図られたとしており、ここでも苧と薦は混交している（宮崎1985a）。
- 5 加賀国での副業としての製苧については、すでに「農隙所作村々寄帳」（1691-1694年）などにも細かな報告がある（加賀藩改作御役所1978）。
- 6 例えば製苧の盛んであった大正10年（1921）の富山県では「旧式製苧機」に加え、堤式、門倉式等、8種類の新型製苧機が出回っていたことが記録されている（富山県内務部産業課1922）。あるいは1931年の『農家副業二関スル研究調査』（三宅1931）では、島根県旧簸川郡では足踏み式製苧式は「約二〇年前、大阪ノ某商人カラ機械ヲ借り受ケ」たのが初めだったと記しているから、明治末頃にはすでにこの織機があったことがわかる。
- 7 近代以降、イグサ織りの敷物の製作技術は飛躍的に改良されている。例えば古くからその名を知られた備後の「花苧」は、イグサを用いて織られる、いわゆるゴザであるが、その「従来型の織機」は、「樋と称して箴と綾取とを兼ねたる装置の粗略なる立機が一種あったきり」で挿蘭工と織工の2人で織ったものというから、藁苧の織機と同じものと思われる（帝国発明協会1911）。その

機が明治初年、備中国の磯崎眠亀によって改良され、複雑化・大型化することによって、色柄を織り込んだ、より精緻で華やかな錦莞蔴きんかんえんが作られることになった（吉原2008）。ここで、蕁蔴とゴザは全く異なる敷物としての道を歩み出すことになるが、こうしたゴザ織機の改良が蕁蔴の織機へも応用された可能性は十分に考えられるだろう。

[Summary]

## *Mushiro* and Their Manufacturing Techniques

IMAISHI Migiwa

A study is made of the technique for making *mushiro*, a type of straw mats, with focus on the changes in the form of the loom used, based on paintings of the medieval and early modern periods and existing folk materials.

*Mushiro* are mats made by weaving straw that were once an essential part of the people's lives. They were also important sources of income and merchandise from old. It is known that there were *mushiro* weavers in the late Heian period and that *mushiro* were commonly made throughout the country in the modern period, their manufacture having been encouraged as a side job. In principle, manufacture of *mushiro* is similar to weaving. Straw ropes are stretched across a wooden frame called *mushiro-bata* to serve as warp, and pieces of straw are woven as weft. Each straw rope is passed through a wooden tool called *kote* which is used in the same way as a heddle in weaving. *Kote* is also used to beat and tighten the weft (straw) that has been passed through the warp. It is from this movement that making of *mushiro* is also called *mushiro-uchi*, or beating *mushiro*.

A comparative study of *mushiro-bata* found in historical documents and actual *mushiro-bata* of the modern period shows that there had been very little change in the technique of making *mushiro* during the medieval, early modern and modern periods in respect to the structure consisting of an upright, rectangular wooden frame and the use of *kote*. Furthermore, there were very little regional differences in the form of *mushiro-bata*. This implies that the development of the technique for manufacturing *mushiro* did not depend on inventions and improvements within given regions but that it was introduced to different regions after it had become fixed to a certain degree. In addition, it may be said that the structure of *mushiro-bata* itself was so simple that there was very little room for improvement and that the technique for manufacturing *mushiro* were introduced throughout the country from quite early on in history.

*Mushiro* are folk utensils that have very simple form and are made with very simple technique. However, people's lives consisted of trifling techniques like that used to manufacture *mushiro*, and in that sense *mushiro* are very important in people's lives even though they are simple, everyday utensils. Techniques and objects as well as ways of life that are unique or characteristic are investigated and documented when they are in danger of decline or loss; at times, they are even protected as folk cultural properties. However, simple, everyday techniques and knowledge are often forgotten and disappear from history. Thus, it is important to consider the necessity and urgency of accumulating research on folk techniques which may seem trifling like that of manufacturing *mushiro*.



Research and Reports on Intangible Cultural Heritage  
Number 6  
2012

Publisher:

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo  
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告 第6号

平成24年3月26日印刷

平成24年3月29日発行

編 集	独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 『無形文化遺産研究報告』編集委員会
編集委員	無形文化遺産部長 無形文化財研究室長 音声・映像記録研究室長
	宮 田 繁 幸 高 桑 いづみ 飯 島 満
発 行	独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43 電話 03 (3823) 2241

© 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所 2012

National Research Institute for  
Cultural Properties, Tokyo